

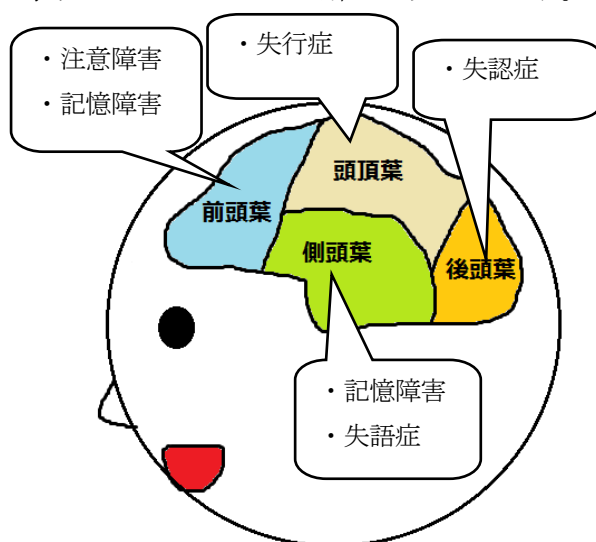


高次脳機能障害について

リハビリテーション科 医療技師
言語聴覚士 三原元樹

○高次脳機能障害とは

リハビリテーション科には、脳血管疾患、脳外傷、脳炎などにより、言語障害、記憶障害、注意障害などをきたす患者さんのリハビリ依頼がきます。脳に障害を受けるといっても、脳全体が障害を受けるわけではありません。脳の一部あるいは少し広い領域に障害を受けることで、それまで保たれていた健康な機能が正常に機能しない状態となります。また、脳の損傷部位や、どの程度損傷したかによって、現れる症状も異なります。損傷された領域によっては一つだけの症状ではなく、複数の症状が現れ、混乱してしまいます。そのため、ご家族やまわりの方々の理解が大切になります。



○高次脳機能障害の症状

【注意障害】

脳に損傷を受けた後は、ぼんやりしたり、表情の動きが乏しくなったり、全体に反応が遅くなることがあります。これらは全般性の注意障害といわれる症状です。注意障害は、『一つのことが続けられない(注意の持続)』、『見たいものに気がつかない(選択性注意)』、『まわりの声や音にすぐ注意がいきってしまい落ち着かない(同時処理)』、『状況に応じて注意を転換できず、同じことを何度も言ったり、同じ行動を繰り返したりする(注意の転換)』、という4つの注意機能がうまくいかないために起こります。

【記憶障害】

記憶には、今、見たり聞いたりしたことを覚える力の記銘力と思い出す力の想起力があります。脳に損傷を受けた場合、昔のことを思い出す力の想起力は比較的保たれていることが多いですが、新しいことを覚える力の記銘力が低下してしまう人が多いです。見たことや聞いたことを数分から数時間後には忘れしまう患者さんもいます。

【失語症】

「話す」「聞く」「読む」「書く」の言葉によるコミュニケーション全般に関わる障害です。話そうとするが言葉が出てこない。相手の言っている言葉の意味が分からない。文章を読むことができない。文字を書くことができない。など

の症状がでます。

コミュニケーションを取ることが難しくなるため、一人で悩み、気持ちが落ち込み、孤独感が強くなることが多いです。

【失認症】

見ること、聞くこと、触ることの機能自体には問題ないですが、それが何であるかわからなくなる症状です。ものは見えているのに、見たものを1つのまとまった形として捉えられなかったり、1つの形としては捉えられるが、意味と結びつかなくなったりします。その為、触ったり聞いたりするとわかりますが、見ただけでは何かわからなくなります。

【失行症】

麻痺などはないにも関わらず、日常生活で行っている一連の動作(歯を磨く動作、髪をとかす動作、服を脱いだり着たりする)がうまくできなくなります。

動作自体は理解できているけれど、実際にやってみるとうまくできません。

(症状の一例)



○リハビリテーション

まずは、原因となった病気に対して治療が行われます。その後、障害の程度や時期に応じて次のリハビリテーションが行われます。

- ・損傷された機能の向上を目指す練習
- ・保たれている機能を活用し代償する練習
- ・電子機器(スマホなど)を使用して環境調整を行い、活用する練習
- ・日常生活の向上を目指す練習

○支援方法

日常生活や社会生活を送る上で困難を生じやすい一方で、外見からは障害が分かりにくく、ご本人でも障害に気づきにくいことも多いため、「見えない障害」とも言われています。そのため、ご家族・ご本人ともに混乱され戸惑うことがあります。高次脳機能障害では、どこまでが元来の性格や能力で、どこからが障害なのかを厳密に区別することが難しいので、できること、できないことを評価して、今までの生活や人生観を尊重して、なるべくご本人が主体的に行動でき、日常生活を少しでも円滑に送れるように周囲の理解を受けながら、環境を整えていくことが大切です。

